

「忘れられた者達の願い」を聴く人

大原勝人詩集『通りゃんすな』に寄せて

1 「忘れえぬ人達」

どうして大原勝人さんの詩篇には、溢れんばかりの生命力があるのか。八十歳を超えても少しも枯れない生命力の源は何であろうか。初めての詩集の原稿を読んだ時、大原さんには特別なエネルギーでもあるように思われた。その秘密を解いていくことが、大原さんの詩篇の理解の鍵であるかもしれない。

大原さんの詩篇は詩誌「衣」や「モデラート」で拝読していた、私は精神的に若い詩人だという印象を抱いていた。それは詩の中に未来を孕んでいる生きる力のようなものを感じていたからだ。初めて大原さんと会ったのは、二〇〇六年九月に東京の日本橋で開かれた山本十四尾さんの詩集『水の充実』の出版記念会だった。三十名ほどの山本さんと親しい詩人が集まった。偶然にも大原さんが私の前の席であった。詩の印象でもっと若い詩人だと想像していたので予想外だった。しかし話しているうちに精神的な若さを感じて、抱いていたことが間違っていないなかつたと思つた。私が大原さんに対して直観的に感じたことは、鳴海英吉や浜田知章と同じように、誰に対してもわけへだてのない人間性だった。社会的な地位や年齢、男女差で人間を見な

い、その人物そのものの価値を見ようとしてゐる温かい眼差しだった。そのような品格は学ぶことのできない何かであり、それを備えていると私は感じた。

今回、大原さんの第一詩集の英解説文を書くにあたって、大原さんがかつて家族のために執筆した、門外不出の自伝的な回顧録・短歌集である『道草』と『波の華』の二冊を借りて拝読した。先祖や家族・兄弟姉妹のこと、大原さんの幼少時代から五十歳頃まで経験した赤裸々な真実が記録されている。そこには家族親族の生き死にの哀しい歴史も記されていた。

大原さんは尾道に近い広島県豊田郡沼田西村（現在の三原市沼田西町）に生まれた。九人兄弟の五男だったが、下の妹が、小学校入学後すぐに肺炎にかかり八歳で亡くなってしまった。そのことを記した短歌がある。

妹の苦しき時は手を合わし

おがむその手に泣きて口よす

なをるとてけなげにも言いし言の葉の

悲しからむや死を待つばかりの吾が妹なる故

吾本に落書せしと しかりたりき

妹の文字も 今は悲しく

大原さんは「忘れえぬ人達」の中で真つ先に妹のことを挙げてその死を悼んでいる。死んでいく妹の悲しみを自分の原点に据えて、若くして死んでいった者たちへの無念を受けとめていく。また三つ上の兄の温巴あつみは一九四四年、二十一歳の時に南太平洋ブーゲンビル島で戦死した。父の友人で映画監督の巨匠であつた同郷の田坂具隆を頼つて、兄は映画俳優を志していたが、夢をあきらめて軍隊に入った。その兄の無念さを大原さんは次のように詠っている。

みんなみのブーゲンビルに建てしと言つ

兄の墓は 今もありしや

ふる里のあそびし庭の老い松の
君亡き今も ときわなる悲し

戦後に兄のやり残したことを大原さんは引き継ごうと、田坂具隆の弟であつた田坂勝彦監督のいる京都にも通つたが、俳優もしくはシナリオライターの夢は、実現できなかった。その代わりに組合運動、その後は事業を興すことへと情熱を注いでいった。大原さんの父は商才はなく家を傾かせたが、柔道二段でありながら、徳富蘆花を愛読し、自らも小説を書くなど芸事

を好んでいた。母の実家は宮本と言い宮本武蔵を生んだ村にあり、父の後妻となり、大原さんを筆頭として多くの子を生み、誰よりも働き者だったが五十三歳で亡くなってしまった。大原さんには父の芸術性と母の勤勉さの両方が残されたのだろう。大原さんの精神世界を形づくる上でこの兄妹と父母たちは生涯にわたつて忘れえぬ存在になったのだ。

大原さんは国民学校を卒業し三菱三原車輛製作所に入った。十六歳頃から石川啄木に憧れて短歌を作り出し、歌人や小説家に憧れていたという。しかし戦局はそのような若者たちを徴兵していった。近くの本郷駅から多くの友人を見送り、そして大原さんもその駅から軍隊に入つて行つたのだ。

ふる里の線路の柵につかまりて

見送る友の汽車は消えにき

大原さんは三菱の養成工として働くが、その仲間の三人で文学、哲学、政治の話まで議論をしたという。大原さんにとつて灯火管制の夜の会話などが青春時代だったのだ。終戦間際に通信兵として入隊する前に、その友人たちと遊郭に行ったことや、その時の女性の名前を大原さんは書き記している。大杉栄のアナーキズムに心酔していた友人が特殊船舶部隊の暁部隊に入隊していくことなど、当時の若者たちの揺れ動く内面の真実を

伝えている。ある時、電話で大原さんと回顧録の話になった際に、通信兵として体験した大阪の大空襲については記載していない、その悲惨さがあまりにもひどいので語ろうにも語り得ないと言われた。大原さんにとってそのことは、いつか書かなければならない痛切な課題なのだとは感じられた。

戦後、大原さんは故郷に戻り、三菱三原車輛製作所に復帰する。そこで組合運動を組織する共産党員たちと知り合うことになる。大原さんは労働者思いの優れた人物の党員たちに影響を受け、共産党に入党する。一九四七年には従業員組合の青年部書記長になったりした。大原さんの破天荒なところは、三菱三原車輛製作所を一九四九年にやめて、国際新聞の広島支局尾道駐在員の記者となり、その仕事の関係で自由党の候補者の弁士を引き受けてしまったことだ。共産党員でありながら、敵対する自由党の弁士を引き受けるという背信行為をしてしまったのだ。大原さんにとっては、イデオロギーよりももっと切実なものが優先していたのだろう。しかし痛快なところは、その選挙運動員の中に将来を伴にする良江さんと出会ったことだ。大原さんの強運なところは、逆境の中で大切なものを掴んでしまうところだろう。

一九五〇年に、大原さん達は朝鮮の自主独立を支持した反戦のビラを配布し、集会を開いて訴えた。その結果、占領目的違反の罪に問われて指名手配されてしまう。大原さんは同級生の巡査の助言もあり、良江さんの恋文だけを持って、本郷駅の柵

2 「忘れられた者達の願い」を聴く人

『通りゃんすな』は三章から成っている。第一章「花の叫び」は八篇で、冒頭の「花の叫び」は大原さんの暮らす府中にある工場が閉鎖される情景を記したものだ。

それは吾が子を

至福の腕に抱きかかえるように

この世の幸せをひとり占めにして
ひとつの企業の誕生を祝って

植樹された桜だ

機械の韻律の心地好さが

浮かれた花弁らを紅に染めてゆく

思うにまかせない浮き橋は蛇行を重ねて
想いの径は泥沼の中に消えてゆく
忘れられた者達の願いは届かず
狐狸の類いが横行する経済の暗闇は
取り返す術もなく

泳ぎを遮断された小魚の群れが

景気の外へはじき出されて行った

（「花の叫び」より）

大原さんの詩の特徴は、経営者と労働者の両方の視点を持つ

を乗り越えて夜行列車に飛び乗り、長兄のいる大阪に逃亡することになる。この辺りは映画をみるような劇的な場面である。

大原さんは兄の元で働いていたが翌年の一九五一年には西淀川の昭和パイプに入社し、組合を結成し組合長になり、ストライキで留置所に入れられたこともある。その組合の文化活動で小野十三郎と知り合い、講演にも何度か来てもらい、詩を教えてもらったという。しかし一九五二年には組合を認めようとしてない会社は社員の支持を失い倒産してしまう。その経験を経て、大原さんは自力で会社を経営しようとしていく。大阪で設立した会社は上手くいかなかったが、それを整理し、良江さんの故郷であり、全国でも有数な家具の町である広島県府中に一九六七年に帰り、家具メーカーを設立して現在に至っている。大原さんの前半生は劇的な人生だった。その人生こそが芸術的だとも思えてくる。大原さんは多くの「忘れえぬ人達」のことを記すために詩が自分にとって最適な表現ではないかと思うようになった。そして十代後半にも文語調の詩を書き残しているが、いつしか遠い存在であった小野十三郎の詩がよみがえり、大原さんの背中を押したに違いない。若い頃の芸事であった舞踊やタップダンス、短歌、小説を経て大原さんは詩の世界に入ってきたのだ。その二十年近くの成果が、第一詩集『通りゃんすな』として結実した。大原さんは人を見詰め、時代を記録しようとする眼差しに最も相応しい表現を見つけたのだ。

ていることだ。その二重の視線の根底には、その場所で生きる人達の職場を確保したいという地場産業を担ってきた企業家精神と、工場を稼働させてきた職人魂が、絶妙に融合されているのを感じさせられる。そのような思いを込めて植えられた桜木が、工場から見捨てられる目を描いた詩だ。桜はただの桜ではないことを痛切に感じるこがこの詩の主題なのだ。「忘れられた者達の願い」とは何か。ともに働いてきた者達がみんなの幸せを願って持続してきた職場であつたらうし、自分たち家具職人の伝統的な技であつたかも知れない。しかしそんなことは資本の論理や経済のグローバル化にかかつては、ひとたまりもない。「植樹された桜」の思いなどは死滅していく「小魚の群れ」かも知れない。しかしそれでいいのだろうかと大原さんはどうしても桜の叫び声を聞いてしまうのだ。決して声高に告発しているのではなく、静かに本当にそれでいいのだろうかと問うている。人を生かすために世界はあるのではないか。人が生き生きと暮らすために職場はその場所になくてはならないのではないかと、大原さんは苦悩する「忘れられた者達の願い」を聴いている。

第二章の「十輪院の火渡り」は九篇の詩から成っている。その章題の詩「十輪院の火渡り」はとても爽やかな読後感がある。大原さんはその儀式をただ正確に記録しようとして試みる。

この世の業の大方を

背負い込んだかのごと
紅潮した老若男女が見守る中
境内の広場に山積みされた焚き木の回りを
山伏姿の僧侶達が

やがて法螺貝の音を合図に
先達僧に続いて般若心経が宙を振動する
それに呼応して松明の火が
焚き木の中へ移される

うず高く積み上げられた護摩木も
束にして次々と投げ入れられ

善男善女の願いを飲み込んだ火は忽ち
炎の渦を巻き上げて仁王立ちとなる

猛炎の中に生まれる火の道

黒ぐろと焼け崩れる炭火の道

熱さに耐える向こうに

幸せを信じて人々は素足で渡り始める

〔十輪院の火渡り〕より〕

この世界は自分の思うとおりには上手くいかないことが多いが、それでも希望を捨てずに生きる知恵をこの詩は伝えている。自分たちの実現できなかった夢や希望は「この世の業」であり、それを護摩木のように燃やして火の道にする。その火の道のし

を渡っていく。この行為を体験して大原さんは自分の経てきた波乱の人生を投影していったのではないか。それだけでなく、この火渡りの行為こそが、人が生きていくという行為を象徴しているのではないかと感じたに違いない。その意味でこの詩は

普遍性があり、大原さんの詩の代表作になるのではないかと思う。「幸せを信じて人々は素足で渡り始める」と大原さんは人間への信頼を大らかに語り始める。そこに私は絶望の中から生きることの希望を語る優れた詩的精神を感じるので。

詩集題になった「通りゃんすな」は、大原さんが大病をして手術台の上で幼い頃の村祭りの夢を見たことから始まる。祭りが終わると友だちは橋を渡って姿を消していった。自分も渡ろうとすると「纏わりつくかずら」が通せんぼをするのだ。

凌霄花の花だけが鮮やかな

朽ちた橋を渡ろうとして

またしても纏わりつくかずらの通せんぼ

生きるという聖域に名を借りて

噛み違った歯車は狂ったまま

くり返し重ねてきた恥と慾の数々

悔恨の海は深く淀み

怨嗟の声だけが遠く海鳴りのように

魂をしめつける

せめてあの橋を渡ればと

行手を遮るものがある

それは、通りゃんすな、と

煩惱の此岸に私を押し返した

かずらのように痩せ細った

亡き父母の手だ

〔通りゃんすな〕より〕

この詩を読んで大原さんの生命力のエネルギーが迸ってくる思いがした。亡き父母から降り注がれている愛を受けとめ、それに深く感謝している。自分を超えている存在からの慈しみと繋がっていることを確信しているからだろう。父母の痩せ細った手が子供の生を促しているのだという認識は考えさせられる。大原さんの詩は、現代に薄れてきた親子の絆やそれを超えた人間愛など、生きてこの世にあるということの祝福された存在感を再認識させてくれる。

第三章の最後の二篇はブーゲンビルで亡くなった兄や同世代の若者の戦死者のことを悼んだ詩篇だ。兄の無念を生涯抱き続けている大原さんがどうしても書かざるを得ない詩であった。私には大原さんが兄のために詩の墓を作ったのだと思われる。私は多くの若者にこの詩集を読んで欲しいと願っている。

正義の戦が正義の戦でなくなった今

兄は幽冥の地で何を思っているだろうか

晩秋の雲の流れはあわただし

あの雲の果てに南海の空が広がり

あの空のどこかに星となつて

魂魄を留めているのだろうか

大気が静寂に沈むとき

二十の慟哭が恩讐の空を揺さぶる

ゆくりなく流れ雲の彼方に合掌を贈る

今 吾が子より尚 年端の行かない

兄に寄せる鎮魂の祈りでもある

〔秋〕より〕